

## 京都の洋風銭湯「宝湯」

原田 純子

### 1 はじめに

銭湯「宝湯」は、京都市伏見区深草大亀谷西久宝寺町、元陸軍衛戍病院・現京都医療センターの東側、道から少し奥まった所に西向きに建つ。洋風な外観に、暖簾と下足室がなければ銭湯には見えないかもしれない（写真1）。とはいえ創業90年、地域の人たちの暮らしと共にこの街の移り変わりを見守り続けてきた。



写真1 外観 正面西面



写真2 外観古写真（昭和6年頃撮影）  
右の黒い建物はおが屑や廃材を貯蔵する燃料庫

本編は平成28年『京都を彩る建物や庭園』認定調査報告書より建物の特徴、建築経緯から宝湯の景観的、文化財的、そしてゆかり的価値を紹介する。

### 2 建物の特徴

建物は、木造平屋建モルタル仕上げの脱衣室棟とコンクリートブロック造平屋建の浴室棟を連結した構成で、前面に下足室、浴室棟北側にボイラー室が付く。建築支払書より昭和6年（1931）建築とわかる。

#### ■外観意匠

平屋ながら2階建洋館にみえる看板建築で、屋根軒を中央に楕形ペディメント風、左右にコーニス風にパラペットで立ち上げる。「寶温泉」と書かれたレリーフ看板、付け柱の柱頭には徽章リボン風、連続した半円形アーチ窓、その半円部分には剣と植物らしきデザインが装飾されている。半円窓の障子の格子がアール・デコ風にも見える（写真3）。北側張り出し部分の半円形アーチ窓は、装飾された半円が下であり、その曲線に合わせて建具が造られ、当時の職人の苦勞の跡が見てとれる。北西角の柱型柱頭にはスズランのような花のレリーフが装飾されている（写真4）。外壁の北面、西面、南面と望見できる3面を、パラペット、貼り付け柱、組積造を模した目地を入れた



写真3 外観正面 看板建築



写真5 女性脱衣室から西面  
ベビーベッドが並ぶ



写真4 外観正面 北側張り出し部分



写真6 男性脱衣室から北面

モルタルで仕上げ、全体がセセッション風にまとめられ、堂々とした風格すら感じられる(写真1, 2)。

#### ■脱衣室棟(写真5～8)

下足室は、モザイクタイル貼りの銭湯らしい空間だが、硝子障子を開けると、番台の向こうに、高窓から自然光が差し込む、擬洋風な吹抜け大空間が広がる。脱衣室の男女を仕切るのとは低くおさえられた板壁だけで、見上げると、白く大きな天井を二分する太い梁を、2本のトスカナ式風の円柱が支えている。柱は、模造大理石のペDESTALの上にベース、エンタシスの柱身、縦に溝彫りが施された柱頭で装飾されている。他、廻り縁、元照明・現シーリングファンの中心飾り、梁やたれ壁の装飾か

ら、映画「テルマエ・ロマエ」の古代ローマの世界がよぎる(写真5, 6, 8)。

竣工当初はスズラン形のシャンデリアが吊られていたそうだが、戦時中に外され、戦後、進駐軍が置いていったアメリカ製シーリングファンが取り付けられた。男性脱衣室では今も当時のものを使用している。一方、床は板張りに藤藁が敷かれ、家具、設備類は、京都の銭湯で見られる定番の数々が並ぶ。円柱の前の招き猫も愛らしい(写真8)。京都の銭湯は、脱いだ服を籠にまとめた後に衣服棚へ入れるのが慣習となっており、宝湯も同様、竣工当時の扉付衣服棚の上に藤の脱衣籠が並ぶ(写真7)。

浴室棟との連結部分は、下足室と共に、昭和44年(1969)に新設された。



写真7 男性脱衣室  
扉の番号が朱色で書かれた男性衣服棚  
進駐軍のアメリカ製シーリングファン



写真8 男性脱衣室から連結部分と北面

### ■浴室棟（写真9～11）

浴室棟は、昭和44年、煉瓦造からコンクリートブロック造に建替え拡張され、さらに昭和56年（1981）、大改修され今に至る。天井は、女湯と男湯に渡って掛けられた大きなかまぼこ型をしている。中央には天窓を兼ねた湯気抜きが設けられ、周りには結露水を受け止める樋が巡らされている。床、壁、浴槽は場に合わせ、いろいろなモザイクタイルが貼られ、ポップな印象も受ける。中央付近には、島カランが3つ設置されている（写真9）。

浴槽は、男女とも手前から主湯、気泡風呂、人間洗濯機、電気風呂と並ぶ。気泡風呂の底部には鯉の形のタイルが施されており、湯のゆらめきにより泳いでいるかに見える（写真10）。人間洗濯機は円形の浴槽で、泡が湧き出る中内部側に斜め方向のジェットが仕込まれており、水流が反時計回りに回転する（写真11）。脱衣室側に張り出した水風呂はライオンの口から水が出る。さらにサウナよりも低温で湿度の高い蒸し風呂も増設されている。



写真9 浴室（女湯）東面



写真10 鯉タイル



写真11 人間洗濯機

### 3 建築経緯

外観は、今となれば周辺のまちなみから異彩を放つ。竣工当時の時代と深草の地域性から建築経緯を詳しくたどる。

宝湯から南西1kmの所に、当地区の氏神である藤森神社がある。創祀も古く菖蒲の節句発祥の神社で、菖蒲は尚武、勝負に通じると勝運を呼ぶ神として、また古くから駆馬神事を営むことから馬の神として信仰を集めてきた<sup>1)</sup>。

一方、深草村という地域は、伏見街道が南北に、大津街道が東西に走る交通の要衝であるが、古くから皇室の葬送地でもあり、明治時代まで、のどかな農村地域でもあった。

ところが近代に入り明治31年(1898)藤森神社の東隣に歩兵第三十八連隊、歩兵第十九旅団、京都市連隊区司令部が、続いて明治41年(1908)には煉瓦造の陸軍第十六師団司令部が建設される<sup>2)</sup>。

閑静な深草村が、第十六師団の設置に伴い、南北に「師団街道」、東西に「第一軍道」「第二軍道」「第三軍道」が敷設され<sup>3)</sup>、大亀谷においても練兵場・射撃場が次々と設営される。次第に軍靴の喧噪が当地を包むようになり、「軍隊のまち」へ大きく変貌する<sup>4)</sup>。

また当地は、低湿地で泥炭池の地層のため、良質な粘土質の土壌があり、質の高い伏流水にも恵まれた地域でもある。古くから瓦始め窯業が行われ、藤森神社内にも地下から湧き出る御神水「不二の水」がある<sup>5)</sup>。

明治維新後の京都は、疏水事業など産業

の振興を図り、煉瓦造の近代建築が多数建設された。明治19年(1886)京都府公営の煉瓦工場が山科御陵に新設され、翌年には民間の煉瓦工場が深草フチ町に開設される。煉瓦は明治中期以降、建設資材としてますます需要を拡大するも、大正12年(1923)関東大震災で、煉瓦を構造に用いた建物が大きな被害を受けたことで、以降急速に需要が減る。

当時の深草フチ町には明治20年(1887)創業竹村煉化石製造所、明治35年(1902)創業山田工場の煉瓦工場があったことが確認できた。竹村煉化石製造所は昭和6年(1931)、山田工場も昭和7年(1932)にそれぞれ閉じている<sup>6)</sup>。

「寶温泉建築支拂書」(昭和6年5月より昭和6年12月31日)を見ると山田達造、京都瓦煉、竹村煉瓦、山田煉瓦から、合計3万2千本以上の煉瓦を購入している。他、白セメン1丁やコンクリボード、セメン、石灰百俵、ハシラ受、大理石などが、計上されている<sup>7)</sup>。

所有者の村田初音さんより、「宝湯の建築主村田正彦の父村田末廣は、当時煉瓦工場を経営し、工場は深草フチ町に構えていた」と伺う。建築申請書類にも「建築主黒煉瓦製造業村田正彦」とある<sup>8)</sup>。黒煉瓦とは焼き傷があるが高硬度な煉瓦のことで、浴室棟の基礎や擁壁にも使用したと伺う。村田末廣を調べると、昭和12年(1937)の「京都市電話番号簿」に、「村田末廣918 丹波橋町白水方 煉瓦製造」と掲載されていた<sup>9)</sup>。

初音さんから「村田末廣は、長男正彦と

一緒に煉瓦工場を営んでいたが、正彦が一晩の患いで耳が聞こえなくなった。そのことを憂慮して銭湯を建てた」と伺った。この地は、良質な土と共に、温泉こそ出ないが、ミネラル豊富な地下水が利用できる。煉瓦業界の斜陽と後継の病気が重なるも、陸軍の街となった深草で、陸軍病院裏の当地で、兵士の慰労に、煉瓦造の浴室棟を有する銭湯建設を決心したと思われる。

「建築申請書類」には、昭和5年(1930)9月18日和風2階建てで建築申請をして昭和6年5月12日建築認可證印がある。建築設計者は中清水由次郎、工事は中清水工務所、図面より南北に長い5間×約10間で、木造2階建て脱衣室、煉瓦造平屋建浴室、木造平屋建火焚場、便所と鉄造の煙突を計画していた。同じ昭和6年5月12日京都府の認可證印のある「湯屋営業取締規則第二條ノ事項」にも、脱衣室棟は木造2階建、住所深草大亀谷から「大亀湯」と書かれている<sup>10)</sup>(図2)。

その後、大幅な設計変更があり、竣工が予定より半年遅れたと伝わる。「湯屋新築設計変更図」があるが、それ以外の書類がなく設計者も特定できない。建物の配置から90° 変わり東西に長い約9間×約6間の計画となり、脱衣室棟は木造平屋建モルタル仕上げ及び斜面を利用した一部地下室となる。図面の正面図の詳細は、今の外観と異なる。図面の屋号には「寶湯」とあるが、その後「寶温泉」に変更されている。「寶」は西久宝寺町の宝である(図3, 4, 5)。

当初、燃料に石炭の他、おが屑や解体された家の廃材なども使っていた。脱衣室棟

の外観と柱、梁の装飾など内装、衣服棚も竣工当時のものが現存している。浴室は、中央に浴槽を設け、その周囲にはすべり止めの石張りが施されていた。その石は現在、居宅の玄関前に敷石で使われている。脱衣室は男性10.07坪女性6.93坪で男性の方が広い(図4, 6)。

昭和44年(1969)、煉瓦造の浴室はコンクリートブロック造に建て替えられ、拡張した。併せてボイラー室を浴室北側に新設、煙突も更新する。脱衣室地下に窯焼き従業員の居室があったが、浴室解体時にガラで埋められた。保健所の指導により、屋号を「寶温泉」から「宝湯」に変え、玄関前に下足室を増築する。当時は第2次ベビーブームの時期で女性脱衣室を広い男性脱衣室へ入れ替え、かつベビーベッド設置のため衣服棚を北面壁面に取り付けするため外壁を出している。浴室は、主湯の他ジェット風呂、薬湯、こども用の浅い浴槽とバラエティ豊かで、曲線で配置した。この時に新調した番台が現在も使われている(図6)。

昭和56年(1981)、燃料が再生油に変更、ボイラーも交換される。浴室も大改修して、現在の姿となる。その際に当時流行していた人間洗濯機を導入、蒸し風呂も増設する(図6)。

平成27年にボイラーを更新する。

## 4 類例考察

洋風建築の銭湯

新地湯

所在地：京都市伏見区南新地4-31

構造形式：鉄筋コンクリート造 2階建

建築年代：昭和6年（1931）

新地湯は、宝湯と同じ伏見区、建築年代も同じ洋風銭湯である。宝湯の「湯屋新築設計変更図」の正面図（図3）は、半円アーチとアーチを受ける水平梁風の飾りがあり、新地湯のファサードの方が近い。増築された下足室の形状も酷似していて同じように保健所の指導を受けたことが窺える（写真12）。また浴室には鯉型のタイル始め、随所に宝湯と同じタイルが貼られている。鯉型タイルは、伏見区の呉竹湯（閉館）や上京区の源湯にもある<sup>11)</sup>。

宝湯との相違点は、鉄筋コンクリート造 2階建であること、他、錦湯（中京区 昭和5年（1930））の浴室も鉄筋コンクリート造で、両銭湯は鉄筋コンクリート造が普及し始める時期に先駆けて導入したと思われる。また2階建の銭湯は京都市内では多く見られ、宝湯の方が敷地に余裕があったという特殊性がある。

## 5 まとめ

宝湯は京都の銭湯を案内する書籍によく紹介されている<sup>12)</sup>。林宏樹『京都極楽銭湯



写真12 新地湯外観

読本』によると、京都市内に残る戦前に建てられたインパクトある洋風銭湯は、往年は10件ほどあったようだ<sup>13)</sup>。が、今や宝湯と新地湯の2軒となってしまった。なかでも宝湯は、木造ながら3面モルタル仕上げの外観と古代ローマ風な装飾で統一されている脱衣室内観がほぼ建築時の姿を保つ希少な建物である。

計画時は京都でよく見る和風建築の銭湯だったが、当時の「軍隊のまち」にふさわしいようにと<sup>14)</sup>一転、大幅な設計変更をして今の形の洋風銭湯となった。当時の貴重な記録も残っていて、戦後の更新の履歴も合わせて、近代京都の銭湯の歴史を伝える興味深い建物である。

とはいえ、宝湯も近年例に漏れず、経営的に厳しい状況であることに変わりがない。「ますますお客さんが少なくなった、燃料代が出ない日もある、満足な修理もできない。」と初音さん、三代目の奥さんで、昭和4年（1929）生まれながらかくしゃくとされていて、長女夫婦に助けられながらも毎日番台に座っておられる。

京都の銭湯文化に、「宝湯」ならではの魅力を加味して、なかでも建築時逆境の中、それをバネにして次世代につないだ建築主の心意気を感じる「エピソード」は、現代人も励まされる。「長寿は宝」と初音さんにもあやかり、末長く愛される銭湯であり続けてほしい。



図1 湯屋付近見取図 (昭和6年) (赤で敷地変更)

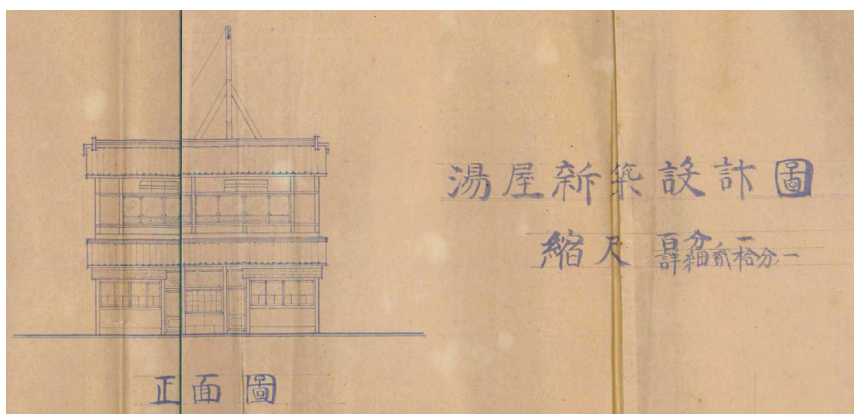


図2 当初湯屋新築設計図 正面図 (昭和6年) 和風2階建

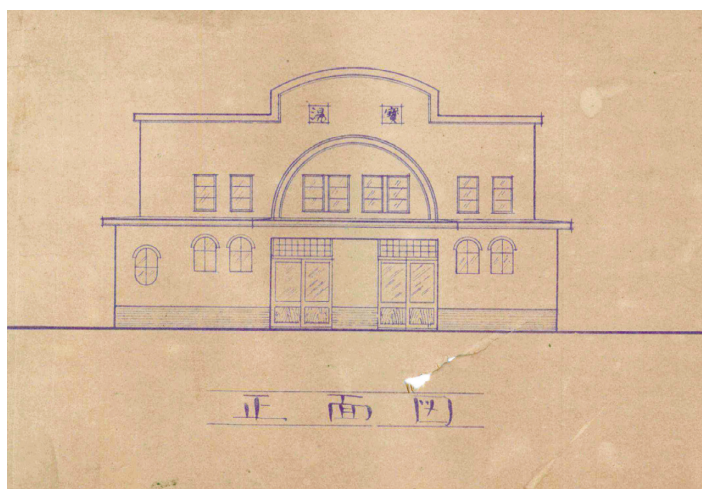


図3 当初湯屋新築設計変更図 正面図 (昭和6年)

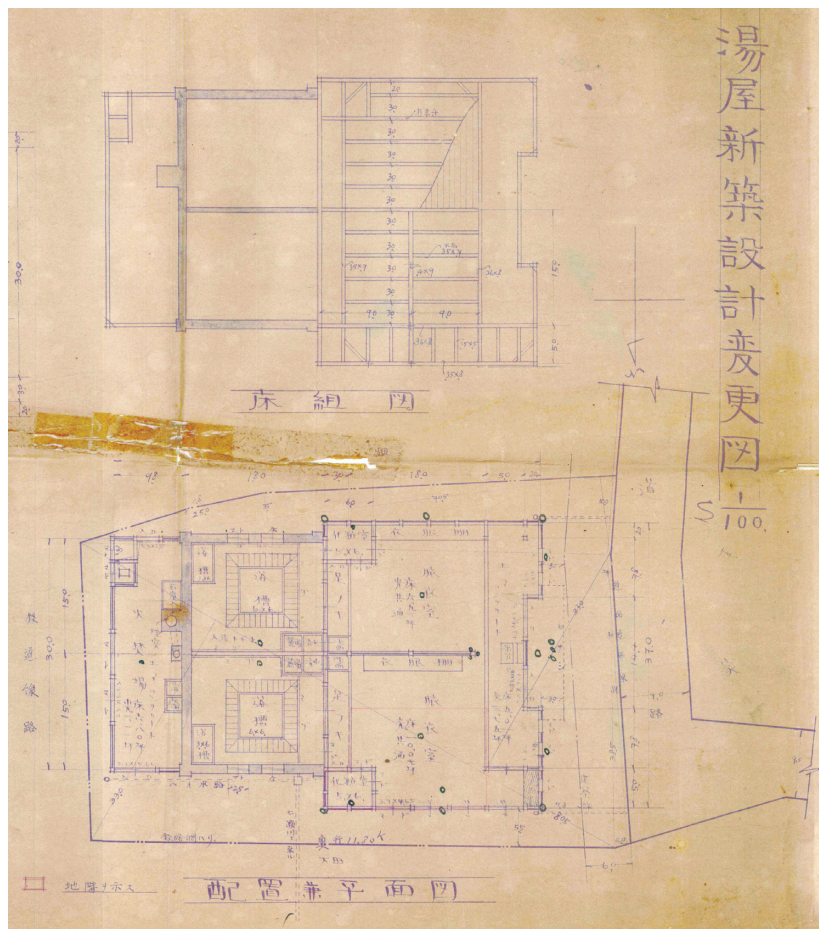


图4 当初湯屋新築設計変更図 床組図 配置図及平面図

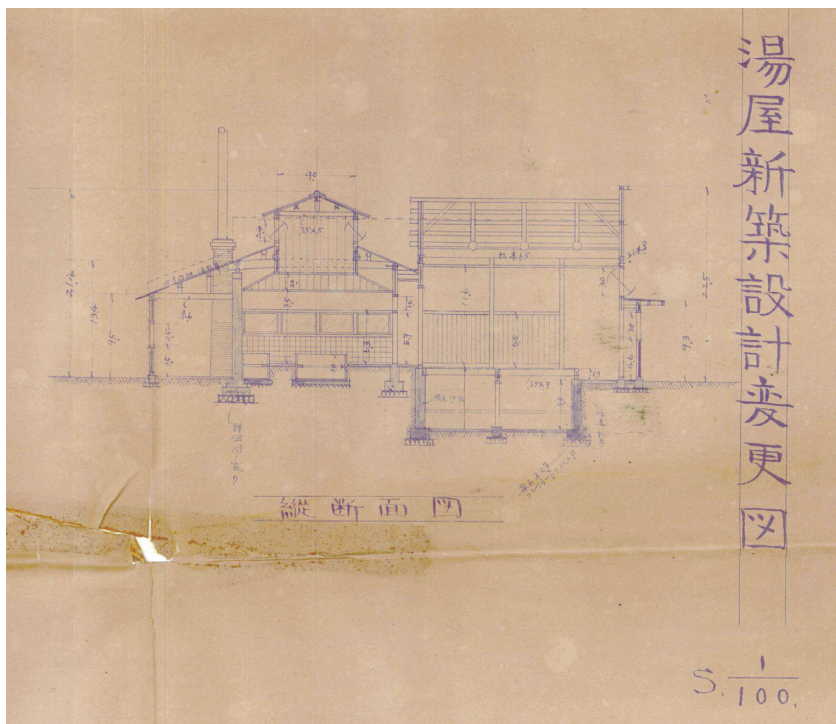


图5 当初湯屋新築設計変更図 断面図





写真13 上棟写真 (昭和6年撮影)

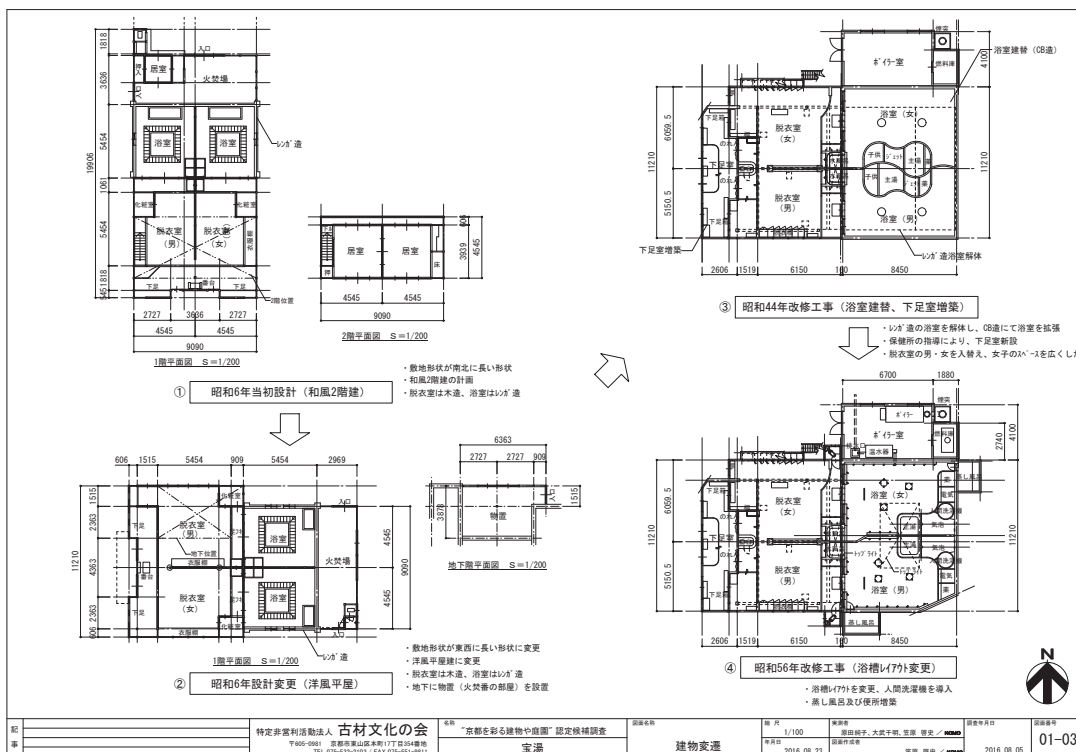


図6 建物変遷図 (図面作成 笠原啓史)

## 付記

掲載にあたり「京都を彩る建物や庭園」の認定調査、資料の提供・掲載、今回また改めてお話を伺うなど全面的にご協力いただきました村田初音氏およびご家族の皆さまには深くお礼を申し上げます。また認定調査の調査員笠原啓史氏、大武千明氏にも再びお世話になりました。ありがとうございました。

各写真は、「京都を彩る建物や庭園」の認定調査時のもので、笠原、大武、原田が撮影したものです。

## 註

- 1) 深草を語る会『深草を語る』（村田博芳堂、2013）P.62
- 2) 京都市『史料 京都の歴史』第16巻 伏見区（平凡社、1991）pp.230-232
- 3) 前掲1）pp.150-151
- 4) 前掲2）P.266, P.232
- 5) 藤森信正、長正「藤森神社ホームページ」
- 6) 京都府煉瓦工場  
<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1bHFSCYJAR5KKlz8A6QpyHRxAYw4&hl=ja&ll=34.95515975970498%2C135.77907846057133&z=13>
- 7) 寶温泉建築支拂書（自昭和6年5月至昭和6年12月31日）
- 8) 建築申請書類（昭和5年9月18日付申請，昭和6年5月12日付認可印有り）
- 9) 京都市「京都市電話番号簿 昭和十二年四月一日現在」（1937）
- 10) 建築申請書類（昭和5年9月18日付申請，昭和6年5月12日付認可印有り）
- 11) 松本康治『レトロ銭湯へようこそ関西版』（戎光祥出版、2015）pp.46-47, pp.54-57
- 12) 松本康治『関西のレトロ銭湯』（戎光祥出版、2009）  
林宏樹『京都極楽銭湯案内』（淡交社、2004）pp.58-59  
大武千明『ひつじの京都銭湯図鑑』（創元社、2016）pp.68-73
- 13) 林宏樹「京都極楽銭湯読本」（淡交社、2011）pp.14-19
- 14) 前掲1）pp.150-151

原田 純子（京都市文化財マネージャー）